

書評

岡田暁生「監修」『ピアノを弾く身体』

(春秋社、平成十五年)

古田島洋介*

本書は久しぶりに快哉を叫んだ音楽書であった。監修者の岡田氏以下、計七名の共著であるが、書名が示す如く、ピアノを弾く行為をあくまで一つの身体運動として理解・考察する視点で一貫しており、黒白の八十八鍵に愛着を覚える向きには、十章すべてが甚だ興味深く且つ有益な内容となっている。第Ⅰ部「ピアノを弾く手」、第Ⅱ部「弾く身体と音楽作品」、第Ⅲ部「ヴィルトゥオーソのパフォーマンス」——この部立てを見ているだけでも、華やかに動く十指が美しい音色を奏でる光景が目に見えらる。要所に添えられた諸々の譜例も、本書の楽しみを増すのに一役買っている。何よりも、七名の執筆者に共通して感じられる問題意識、すなわち「音楽の質に対応する語彙を見つけ出すこと、そしてそれを記述する言語を開発すること」(一二四頁)という意欲が、あたかも通奏低音のように本書全体に鳴りわたり、読み手を飽くことなく前進させるのである。

ただし、あまりに楽しく有益となれば、名ピアニストの充実したコンサートを聴いた後、やたらにアンコールを求めたくなるのと同じく、既に醜を平らげて復た蜀を望まんとする衝動を抑えたい。ここに臆面もなく「音楽を愛している通人(Kenner und Liebhaber)」(九頁)を以て自ら任じ、敢えて三つの問題を提起するゆえんである。

第一は、楽譜の指示を守った場合と弾きやすく変更を加えた場合との演奏効果の相違の問題だ。これは実に面白い話題だが、その演奏効果の違いを言語で具体的に記述するのは至難の業である。ベートーヴェン(ハンマークラヴィーア)ソナタ第一楽章冒頭にある左手の変ロ音から和音への二オクターヴにわたる急速な跳躍を解消し、たとえば変ロ音を右手で取ると、左手だけで弾いた場合と如何なる点で異なるのか。岡田暁生「序」は「たとえ音響的には正しくとも、何かが決定的に損なわれてしまう」(一五頁)と記すのみ。「何か」の正体は明かしてくれない。この問題を採り上げた第一章の大久保賢「作品解釈としての運指」も「(難しさ)からくる緊迫感こそがこの音楽にとっては重要な」(四〇〜四一頁)と述べるにとどまる。これはJ・ホロヴィッツ『アラウとの対話』(みすず書房、昭和六十一年)一七四頁に見えるアラウの見解「肉体的に弾き難いということ自体に表現上の意味があるので。楽々と弾いているように聞こえるならば、その意味はまったく変わってしまいます」に一致するが、果たして「緊迫感」がどれほどの説得力を持つだろうか。弾く者が緊張することは事実にしても、それがそのまま演奏効果としての緊迫感につながるのかどうか。それこそ「何か」飛躍があるように感じられる。この曰く言い難しの部分を何とか言語で埋めてほしかったと思うのは評者だけではないだろう。むろん、大久保氏の言わんとすることは十分に理解できる。氏が言及するアルベニス『イベリ

書評 岡田暁生「監修」『ピアノを弾く身体』

古田島洋介 * 言語文化学科 助教授 日中比較文学

ア》(三六〇三七頁)にせよ、右の〈ハンマークラヴィーア〉ソナタ冒頭にせよ、また〈ワルトシュタイン〉ソナタ第二楽章のオクターヴ・グリッサンド(四一頁。同頁の譜例は「第3楽章」とするが)にせよ、弾きやすく変更すれば「緊迫感」が失われてしまうことは、素人のピアノ好きにとつてすら自明のことだ。けれども、その演奏効果に生ずる相違を今一つ具体的に説明してほしい。演奏の視覚的效果という点にかけては、両手を交差させて件の交口音を右手で取るのも、なかなかのものなのだから。実際、かつてリヒテルが交口音を右手で弾いたとき、評者はその腕の捌きや上半身の捻りに多大な感動を覚えたものだ。

ただし、右に列したような難曲・難所については、暫く「緊迫感」の喪失という説明で納得するにしても、きわめて演奏が容易な箇所となれば、「緊迫感」の消滅と言われても、とうてい納得しがたいだろう。たとえば、同じく〈ハンマークラヴィーア〉ソナタ第一楽章で、展開部のフーガの直前に現れるファンファーレ風の部分である。左手が♩をオクターヴで弾いた後、両手を交差させ、右手が同じ♩を、左手が♩をオクターヴで奏する。この両手の交差には如何なる意味があるのか。視覚的效果のみでないとするれば、それはどのような演奏効果なのか。ぜひ次の機会には詳しい御教示を賜りたく思う。

第二は、ハイフィンガー奏法の問題だ。第三章の大地宏子「鍵盤を〈打つ〉指」が、ヨーロッパにおけるピアノ奏法の歴史と比較し、日本におけるハイフィンガー奏法への拘泥の実態およびその原因を論じている。大地氏の論旨は説得力に富み、ハイフィンガー奏法を信奉していた井口基成がギーゼキングの重力奏法を批判した一節(九七〇九八頁)など、引用文的確にして要を得たものだ。しかし、読み進めながら抱いた疑問が二つある。

疑問の一は、ハイフィンガー奏法の弊害をピアノ教育者・学習者が広く意識するようになったのは中村絃子『チャイコフスキー・コンクール』(中央公論社、昭和六十三年)一七八頁以下の記述がきっかけであり、「この奏法に何の疑いももたずにいるピアノ教師や学習者も、決して少なくはあるまい」(七八頁)とする事実認識である。たしかに中村書によってハイフィンガー奏法の欠点を多数の人が意識するようになったのは事実だろう。しかし、ピアノ教師、特にショパンを得意とする教師が、つとにハイフィンガー奏法が打ち出す音の汚さに気づいていたことも、事実として見のがしてはなるまい。昭和五十年代の前半、評者が師事していたピアノ教師は「指をなるべく伸ばし、指の先ではなく、指の腹で弾いたほうが、柔らかくて良い音が出る」と繰り返し返していた。この先生は桐朋学園大学ピアノ科の出身で、井口愛子に学んだ経験もあり、ショパンを得意としていた。本腰を入れてショパンに取り組めば、必ずからハイフィンガー奏法の通用せぬことを悟るのではないか。第六章の大久保賢「手のドラマ」が注(9)で説くように、ショパンの美しいパッセージが「ハイフィンガー奏法」では……見るも無惨なものへと変貌してしまふ」(一八八頁)からである。早くからハイフィンガー奏法の欠陥を承知していたピアノ教師も「決して少なくはあるまい」。それが言語として表現されなかっただけではないのだろうか。

疑問の二は、ハイフィンガー奏法が、重力奏法によって完全に排斥されるべきなのかという問題だ。最終的には重力奏法でなければ美しい音色は出ず、殊にロマン派音楽は弾けないとしても、重力奏法の準備段階としてハイフィンガー奏法が、いやハイフィンガーによる指の訓練が必要ではないのか。我が師も、指を伸ばして柔らかい音を出すよう助言するかたわら、指を一本ずつ上げて脱力の感覚を確かめつつ、ゆっくりハ

ノンを練習することを勧めた。「指そのものが強くなければ、伸ばした指で張りのある音を奏でられない」というのが、その理由であった。ハイフィンガー練習によって強化された指があればこそその重力奏法というわけである。たといハイフィンガー奏法は排斥すべきだとしても、ただちにハイフィンガー練習の有効性までも否定できるのだろうか。実際はハイフィンガー練習を通じて鍛えた指で重力奏法を身に着けた者が、ひたすらハイフィンガー奏法を貶めて排斥するのは、英語の達人が、かつては英和辞典と首っ引きだったのに、英語に熟達してからはもっぱら英英辞典の有益さを強調し、いつのまにやら英和辞典から蒙った恩恵を忘れて「英和辞典など引いても英語はわからない」と説くのと似たような話ではないのか。少なくとも、素人としては警戒感を禁じ得ない。職業ピアニストや音大生ならば、多量の練習を通じ、重力奏法のみでも指が鍛錬されてゆくだろう。しかし、ほとんど練習時間がなく、一週間に五時間も弾けるかどうか心もとない素人となれば、指の強化はハイフィンガー練習に期待するしかないのではなからうか。要するに、専門家の訓練と素人の練習ではハイフィンガーの意味づけが変わり得るだろう、と愚考するわけである。

第三は、ピアノ演奏におけるミス・タッチの問題だ。岡田暁生氏が第三部への導入「音楽の演出法」で述べる如く(一九〇〜一九二頁)、ヴィルトゥオーソとして知られるホロヴィッツが、数多くのミス・タッチを犯しつつも、達者な運指で正確に弾く一般のピアニストより魅力あふれた演奏を聴かせたことはたしかである。同氏が第十章「ホロヴィッツ編曲《星条旗よ永遠なれ》…」で呈示した「圧倒・魅惑・スリル」(二七五頁)こそ、ヴィルトゥオーソたるホロヴィッツの成功の秘訣だろう。けれども、同氏が「序」に記すように(五頁)、ホロヴィッツは晩年に

なって衰えてからも、ミス・タッチだらけでありながら、やはり魅惑すべきピアノを奏でたのである。いったいピアノ演奏にとってミス・タッチとは何なのか。職業ピアニストと素人のミス・タッチは、どう異なるのか。楽譜に指定された以外の音を誤って弾いてしまう点では、どちらも同じ結果のはずである。

周知のように、ケンプはミス・タッチが少なくなかった。さして難しくないパッセージでも指がもつれることがあり、特に晩年はフォルテの和音が濁りを増したと記憶する。しかし、それでも老ケンプの弾くヘルトシュタインソナタは実に素晴らしく、シューマンやシューベルトの演奏にも大きな感銘を受けた。かえって、はるかに技術の優れたバックハウスが最後の演奏会においてヘルトシュタインソナタ第一楽章で犯した右手オクターヴのミス・タッチのほうが聴き苦しく感じられたのだから不思議なものである。次の機会には、ぜひとも執筆者の方々にミス・タッチの諸相を本格的に論じていただきたい。もしミス・タッチがピアノ演奏にとって瑕疵にすぎないとでもなれば、素人は勇気倍増だろう。もっとも、それを口実にして、ますます練習を怠ることもなりかねまいが。

紙幅の関係上、七名の執筆者の各論文に逐一言及すること能わず。何とぞ御寛恕をお願いしたい。ピアノ演奏者に非ざるはもとより、音楽研究者の端くれにも非ざる一介の素人の身勝手な読書報告として、何かお役に立つ点あらば勿怪の幸いである。